

健康文化

Only Yesterday

高田 健三

師走の中頃になると、いつものように海外の友人、知人達からクリスマス・カードが届き始める。1年振りの便りも多く、カードには、それぞれの思いのこもったメッセージが記されていて、楽しくもあり懐かしくもある。中には読んでいくうちに、40年前のその人の顔が彷彿として浮かび上がり、私自身も若かりし当時を思い出し、何となく華やいだ気持ちにさせられることもある。人によっては現況を伝える写真版のものもあるが、今尚、かくしゃくとした風貌の持ち主ではあっても、流石に何十年という時の刻みは争えず、身につまされる思いをすることもある。それに引き換え、若い年代の写真賀状等は、社会人としての成長が伝わって来て、ほほえましくもなる。平素疎遠になっていた人との、年に一度の挨拶は、庶民にとっては、1年を区切る実感を手にすることの出来るささやかな儀式なのである。

ニュージーランドの知人からのカードは、**Where did the time go? It seemed only yesterday that we wrote our 2000 Xmas card**、という書き出しで始まっていた。彼ら夫婦はそれぞれ、教育や社会福祉の仕事で活躍しているプラス志向の強い人達であるが、この1年は、仕事に追われ、その上、奥さんが一時入院したりで、目茶目茶に忙しく、1年があつという間に過ぎてしまったという。やっと一段落ついてクリスマス・カードを書くペンをとった時、前に書いたのは“つい昨日”であったように思えたというのである。

この年頭に頂いた賀状の中には、昨年半ば実験の手順に問題が見つかり、その解決に手間取る間、時間だけがどんどん追い越していくようで、気が気ではなかったというものがあつた。時間は誰にも平等に与えられているはずなのに、なぜ自分にはつれなく足速やに過ぎ去っていくのかと恨めしくさえあつたという。しかし、今は研究も順調で、今年は期するものがあると、そのことを強調したかったようであつた。

皆それぞれ第一線で活躍している人達で、毎日が時間との闘いである様子がよく伝わってくる。

子供の頃、年の暮れになると毎晩、机に向かって筆を執っている父の後姿を

見たことを思い出す。同じような文字の並んだ葉書が何枚もあるので、書き損じて、書き直しをしているとばかり思ったこともあった。当時は年賀状は勿論、儀礼的な書状は墨と筆を使ったものであるが、だんだん世の中のテンポが速まるにつれて、ペン書きになり、印刷になり、今では宛名までワープロが使われるようになった。それ程までして労力と時間を惜しむ程に忙しいようにも思えないのだが、と言って、私自身も随分以前から印刷したものを使っている。便利なものは何でもすぐ使うというのが現代人であるが、私の場合、最大の理由は至って単純で、筆書きにしてもペン字にしても、年齢にまったくそぐわないほど字が下手だからである。私の書いた“謹賀新年”では、祝意どころか不真面目に書いたとしか思われかねない恐れが多分にある。しかし、宛名書きだけは悪筆もものかわ、自筆を押し通しているのは、先方に対する唯一のささやかな私の表敬の方法なのである。

日本的文化の崩壊の進む中、年に一度の賀状交換は残しておきたい習慣である。しかしIT革命の進捗のテンポからすると、クリスマス・カードや年賀状は、各家庭の情報端末に直接配信されるようになるのも時間の問題なのかもしれない。手にとってこそ、相手の気持ちが伝わるのであって、液晶画面での“謹賀新年”ではヴァーチャルな感じになってしまいそうである。

かつて我々人類の祖先は、夜が明けるとともに仕事を始め、日が沈むと床につくといった自然界の時の流れに従って生活していたと思われる。太陽が昇れば草原に出て狩りをし、森に入って木の実を集め、日暮れともなれば獲物を囲んで団欒の時を過ごしたのであろう。そんな中で仕事をするにはそれだけの時間がかかること、つまり単位時間あたりの仕事量が、生活の豊かさを左右するという現実には、人間に時間の観念を芽生えさせたに違いないと思う。以来、人間は時間に縛られて生きていく運命を背負わされたのである。

産業革命により、人力が機械力に置き換わってからは、人間生活の様式が大きく変わったことは周知の如くである。初めは機械の動きを操作していた人間が、次第に機械の動きに操られ、追いまくられる世の中になったことは、チャップリンが映画“モダン・タイムズ”の中に辛辣に表現している。

数年前、我が国トップクラスの自動車組立工場を見る機会があった。高度にオートメーション化された広大な工場の中は、種々なロボットが、あるものは粛々と物を運び、あるものは複雑な軌跡を描いてアームをくねらせ、人間には、その間隙を埋めるだけの作業時間しか与えられていない。そこには機械の動きが刻む、“メタリックな時間”だけが支配する巨大なエネルギーの流れだけが存在する。屋外に出たとたん、ひんやりした浜風が頬をかすめた時、急に“人間

の時間”の世界に戻されてほっとしたのは、決して大袈裟ではない。

人はそれぞれ感覚的な時間を持っていて、自分より早いテンポで動く人は気忙しく、遅い人は悠長に見える。テンポの合う人間同士でいると心地よく感ずる。それが人間社会の温もりである。しかしそれも、今のうちの贅沢であろう。何事も時短の今、職場は勿論、人との関係もITジャングルの中、液晶画面という二次元上のものになりそうである。

時間にこだわるのは、一つにはやはり年齢の所為だと思うようになった。子供の頃は、思い切り遊んでもなかなか日が暮れなかったように思ったが、今は何か少し仕事(?)をしただけでも一日が経ってしまったかと思うことがしばしばである。筆の遅い私には、現にこの原稿を書いていると、筆の進みの割には一日の経つのが前にも増して速いと思われて仕方がない。若い頃は新陳代謝が盛んで、身体の状態の変化量が大きく、生理的時間が早く進んでいるのに、時計の刻む物理的時間の速さは一定なので、一日という時の刻みが感覚的に長く感じられるのだという。年齢を重ね、身体的変化量が低下してくると、生理的時間も遅くなり、相対的に時計の時間が短く思えるのである。私など、とくに“光陰矢の如き”年代に入ってしまったが、時間はぜんまいのように巻き戻しはきかない。このまま進むしかない。

いつまで時間との追いかっこが出来るか判らないが、いくら頑張っても人間の寿命は120歳が限度である。我々の体にはそういう“仕掛け”が組み込まれているのである。世界保健機構によれば、健康に生きられる“健康寿命”は、日本人男性で約72歳、女性で約77歳というから、現実には、理論値から見てはるかに厳しいものがある。しかし、これでも世界一の長寿国なのだという。人生50年の時代に比べれば、5割も長生きしているのだから素直に喜ぶべきなのかもしれないが、近頃の長寿社会の問題を見ると果たしてそうなのだろうかと思ってしまう。

動物の寿命について大変に面白い考え方を持っている人がいる。それによると動物にはそれぞれに特有の“時間”というものがあって、それは動物の大きさ(サイズ、たとえば体重)の1/4乗に比例するというのである。(ゾウの時間ネズミの時間：本川達雄、中公新書)100年近くも生きるゾウはゆったりした行動をするが、数年しか寿命がないネズミはちよろちよろと小忙しく歩き回る。たとえば心臓の鼓動はネズミの方がずっと早い。つまり鼓動間隔はゾウの方が時間が長い。

そこで、寿命の長さを鼓動時間で割ってみると、ゾウもネズミも、一生の間に心臓が打つ回数は共に20億回であることが判った。更に驚いたことには、哺

乳動物ならばどの動物をとっても、体の大小(重さ)や寿命の長短にかかわらず、一生涯に打つ心拍数は20億回なのである。100年生きるゾウも、50年のウマも、12年のウサギも、みんな同じ回数だということは、心臓を時計に見立てれば、同じ長さだけ生きたことになる。数年しか生きないネズミも、一生を生き切ったという感覚(満足感?)は、100年生きるゾウと変わらないのではないかと著者は言う。

これは大変示唆に富んだ話である。人間だけに限って見ても、体格の立派な人、行動の悠然とした人、敏捷な人、大都会に住む人、山里に住む人等々、人の生活リズムは千差万別である。乱暴ではあるが、“動物の時間”の考えを延長して人間に当てはめてみよう。すると、今までとは違った人間の姿が浮かんでくるかもしれない。私の好きな作曲家で見れば、バッハ、ハイドン、ベートーベン、シベリウス等、大作曲家と呼ばれる人達は、60歳前後から90歳台まで活躍し、それなりの人生を全うしたと見てよいであろう。一方、天才と呼ばれるモーツァルトやショパンは30歳台で世を去り、その夭折が惜しまれた。しかし、彼らは基準の違う時間の持ち主だったと考えれば、物理的には短い生涯であったとしても、天国ではお互いに、充実した人生を生き切ったことを語り合っているのではないだろうか。

忽然と現れ、あっという間に波瀾万丈の時を駆け抜けた天才といわれる人達の“時間”は、きっと異質のものであったに違いない。そんな天才と比較にならない凡才でも、違ったまなざしで自分を見つめ直せば、新しい生き甲斐が見つかるかもしれない。そう思って少し長生きし過ぎた引け目を感じながら今までの人生に思いを巡らすと、これまでのことが悲喜こもごも、つい昨日のことのように臉のスクリーンに映し出される。追憶に浸るのは私の生きざまにそぐわないが、この慌しい今の時代、時には気を和ませてくれることもある。こんな時私の好きなポップシンガーの歌が浮ぶ。愛の喜びと悲しみを歌わせたら第一人者であったカレン・カーペンターのナンバーに、“Only Yesterday”というのがある。「今までの悲しみや孤独の人生はつい昨日のこと。貴方という素敵な人が見つかって、きっと明日は更に輝いているだろう」と歌う。彼女のようにいかないが、この先どう生きようか、昨日と違う明日に賭けることにしよう。

(名古屋大学名誉教授)